

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1203-06] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:川邊 保孝(東海大学)

13:30 ~ 13:50

[生涯スポーツ-B-05]

女子のスポーツ参加を促進するためのアプローチ（社）

日本語版ポジティブ・ボディ・イメージ尺度（PBIAS）の作成とその信頼性・妥当性の検討

*竹澤 美郁¹、三倉 茜²、小笠原 悦子⁴、鯉川 なつえ²、桜間 裕子³、青木 瑛美³ (1. 東海大学、2. 順天堂大学、3. 順天堂大学女性スポーツ研究センター、4. 順天堂大学大学院)

13:50 ~ 14:10

[生涯スポーツ-B-06]

女子のスポーツ参加促進のためのアプローチ（社）

ボディ・イメージ課題に対処するコーチの自己効力感を高める介入研究

*三倉 茜¹、竹澤 美郁²、小笠原 悦子³、鯉川 なつえ¹、桜間 裕子⁴、青木 瑛美⁴ (1. 順天堂大学、2. 東海大学、3. 順天堂大学大学院、4. 順天堂大学女性スポーツ研究センター)

14:10 ~ 14:30

[生涯スポーツ-B-07]

中国および日本の女性高齢者における体格、生活空間および体力・運動能力の年代差、ならびに国別比較（社,測,介）

*武 可¹、李 忠林²、山次 俊介³、山田 孝禎³、杉浦 宏季⁴ (1. 福井工業大学大学院、2. 中国井岡山大学、3. 福井大学、4. 福井工業大学)

14:30 ~ 14:50

[生涯スポーツ-B-08]

「暮らしと健康とスポーツに関する調査」報告（社）

調査の概要・基礎分析の結果を中心に

*下窪 拓也¹、山本 悦史² (1. 順天堂大学、2. 新潟医療福祉大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1203-06] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:川邊 保孝(東海大学)

13:30 ~ 13:50

[生涯スポーツ-B-05] 女子のスポーツ参加を促進するためのアプローチ (社)

日本語版ポジティブ・ボディ・イメージ尺度 (PBIAS) の作成とその信頼性・妥当性の検討

*竹澤 美郁¹、三倉 茜²、小笠原 悦子⁴、鯉川 なつえ²、桜間 裕子³、青木 瑛美³ (1. 東海大学、2. 順天堂大学、3. 順天堂大学女性スポーツ研究センター、4. 順天堂大学大学院)

【背景】笹川スポーツ財団 (2017) によれば、運動・スポーツ実施率は高校進学とともに低下し、特に女子の減少率が男子よりも著しいことが示されている。このような思春期の女の子がスポーツから離れる要因の一つとして、ボディ・イメージに関する課題が挙げられる。具体的には、「自分の身体に対する恥ずかしさや罪悪感、他者との比較による劣等感」などが、楽しさや継続意欲の低下につながるとされており (Vani et al., 2017)、思春期の身体変化も影響している (Schneider et al., 2023)。

一方、自身の身体を肯定的に認識するほど、自分の体型を正確に認識することから、ポジティブ・ボディ・イメージを育むことが強調されている (生田目ら, 2021)。ポジティブ・ボディ・イメージは、身体への愛着、尊重、受容、快適さ、身体を守る視点でメッセージを解釈する力などを含む多面的概念である (Tylka & Wood-Barcalow, 2015)。その測定には Body Appreciation Scale (BAS)、およびBAS-2が用いられてきたが、思春期特有の発達背景を反映していないことから、Positive Body Image among Adolescents Scale (PBIAS) が新たに開発された。日本では、日本語版BAS-2 (生田目ら, 2017) が作成されているが、PBIASの日本語版は作成されておらず、その信頼性や妥当性についての検討も行われていないのが現状である。

【目的】日本語版PBIASを作成し、信頼性と妥当性を検討することである。

【方法】本研究では日本語版PBIASを作成するためにバックトランスレーションを行い、女子高校生204名にアンケート調査を実施した。データは、確認的因子分析を実施し、信頼性と妥当性を検討した。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1203-06] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:川邊 保孝(東海大学)

13:50 ~ 14:10

[生涯スポーツ-B-06] 女子のスポーツ参加促進のためのアプローチ（社） ボディ・イメージ課題に対処するコーチの自己効力感を高める介入研究

*三倉 茜¹、竹澤 美郁²、小笠原 悦子³、鯉川 なつえ¹、桜間 裕子⁴、青木 瑛美⁴ (1. 順天堂大学、2. 東海大学、3. 順天堂大学大学院、4. 順天堂大学女性スポーツ研究センター)

【背景】近年、女子の運動・スポーツ実施率が低い現状が問題視されている。女子の運動・スポーツ参加を阻む要因の1つにボディ・イメージに関する課題が挙げられる。ボディ・イメージとは、身体に対する自己の知覚や態度を含む、多次元的な構造を持つ概念であり、ポジティブなボディ・イメージを高めることでwell-beingを向上させたりすることが明らかになっている。ボディ・イメージの改善による女子のスポーツ参加において十分な研究はなされていないが、スポーツを通じて女子は多くのボディ・イメージに関するネガティブな経験をしていることが明らかになっているため、その解決のための取り組みを行う必要がある。一方で、スポーツ現場にて女子のボディ・イメージに影響を与えるコーチは、ボディ・イメージが与える影響について認識しつつも、十分に対処できるという自信がないことも明らかになっている。

【目的】女子の運動・スポーツに関わるコーチのボディ・イメージに対処する自己効力感を高めるための介入方法について、その有効性を明らかにすることである。

【方法】本研究ではコーチを対象に、以下2つの研究を実施した。

研究1：ボディ・イメージに対処する自己効力感を測定する尺度（Coach Self-Efficacy for Body Image Scale; CSEBIS）日本語版の作成

研究2：ボディ・イメージに対処する自己効力感を高める介入の効果測定

研究1については、英語版のバックトランスレーションを行い、妥当性の検討を行った。研究2については、2つの介入（オンライン学習ツール、セミナー）の効果を測定するため、ベースラインと各介入後の3時点でのCSEBISの得点を混合モデルによる分析を用いて比較した。

【結果】148名のコーチから回答を収集し、日本語版CSEBISを作成した。介入の効果を測定した結果、2つの介入後有意にCSEBISの得点は向上した。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1203-06] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:川邊 保孝(東海大学)

14:10 ~ 14:30

[生涯スポーツ-B-07] 中国および日本の女性高齢者における体格、生活空間および体力・運動能力の年代差、ならびに国別比較（社,測,介）

*武 可¹、李 忠林²、山次 俊介³、山田 孝禎³、杉浦 宏季⁴ (1. 福井工業大学大学院、2. 中国井岡山大学、3. 福井大学、4. 福井工業大学)

中国における2025年の高齢化率は14.9%（約2.1億人）であり、本格的な高齢化社会に突入した。2050年には高齢化率が約30.7%（約3.8億人）に達することが推測されており、健康の維持・増進および平均寿命の延伸は喫緊の課題とされている。一方、日本は世界第一の長寿国であり、特に健康寿命の延伸において一定の成果を上げてきた。本研究では、中国人女性高齢者の体格、生活空間（LSA）および体力・運動能力と日本人を比較すること、ならびに両国の年代差を検証することを目的とした。対象者は、65歳以上の女性高齢者684名（中国：409名；日本：275名）であった。評価変数は、身長、体重、BMI、LSA、握力、開眼片足立ち支持時間、Functional Reach、10m歩行時間、敏捷性ステップ時間、股関節移動距離とした。年代（65歳代、70歳代、および75歳以上）および国（中国および日本）を要因とした2要因とも対応のない2要因分散分析の結果、中国と日本のいずれにおいても75歳以上は65歳代および70歳代よりもLSAおよび体力・運動能力が劣る傾向にあった。また、中国は日本よりも体格は大きいものの、LSAおよび体力・運動能力は劣る傾向にあった。以上のことから、生活空間および体力・運動能力の加齢変化は中国と日本で変わらないものの、いずれの年代においても多くの変数は中国が日本よりも劣る。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1203-06] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:川邊 保孝(東海大学)

14:30 ~ 14:50

[生涯スポーツ-B-08] 「暮らしと健康とスポーツに関する調査」報告（社）

調査の概要・基礎分析の結果を中心に

*下窪 拓也¹、山本 悦史² (1. 順天堂大学、2. 新潟医療福祉大学)

報告者らは、スポーツ実施の社会経済的格差に問題関心を抱き、現代社会におけるスポーツ実施と社会経済的地位（SES）の関連を把握することを目的として、2024年に「暮らしと健康とスポーツに関する調査」を実行した。本報告では、調査の概要、基礎分析の結果、およびその他の雑感について報告を行う。本調査では、関東圏内の一都六県に居住する20歳から89歳（2024年9月1日時点）の男女を母集団とした。層化二段無作為抽出法によるサンプリングを行った上で、個人の抽出には住民基本台帳を利用し、2,000名を抽出した。調査票は返信用封筒とともに郵送し、回答後に返送してもらう方法を採用した。有効回収数（率）は514名（25.7%）であった。回答者のうち、過去1年間に運動・スポーツを「1日でも実施した」と回答したのは、8割程度であった。そのうち、1週間に1日以上頻度で実施した者は、5割程度であった。もっとも多く実施された種目は散歩・ウォーキングであり、筋力トレーニングや体操がそれに続いた。運動・スポーツを実施した理由としては、「健康のため」が最も高く、その他、「運動不足を感じるから」や「体力増進・維持のため」「楽しみ・気晴らしとして」がそれに続いた。他方で、運動・スポーツを実施しなかった理由としては、「仕事や生活が忙しいから」、「面倒くさいから」、「疲れるから」などの項目があがった。本調査では、スポーツ実施の状況に加え、回答者の所得や学歴、出身家庭の社会経済的状況などといった回答者のSESについても質問を行った。スポーツ実施状況とSESに関しては明確な関連が見られなかったものの、スポーツ・運動を実施しなかった理由については、回答者の所得や出身家庭の環境との関連が確認された。当日は、基礎分析の結果に加えて、調査を通じて得られた雑感や今後の検討課題についても報告する。